

## 第5回 武蔵野市子ども自然体験委員会

日 時：平成16年4月7日（水）  
18時30分～21時00分  
場 所：武蔵野公会堂 第1会議室  
出席委員：安藤委員・石井委員・梅田委員・川住委員・鈴木委員  
高石委員・永田委員・宮寄委員・藁谷委員  
武蔵野市：事務局 子ども家庭部長 ほか10名

### 1. 開会

### 2. 連絡事項

第四回議事録の訂正等について  
事務局の人事異動について

### 3. 議事

#### 梅田委員長

これまでは、自然体験の少ない子どもたちが今までは考えられなかったような症状を呈し始めているということについての認識をしてきたところです。

それに対してどうすればいいのかという話に前回からはいっています。それについてプログラムの案がいくつか出ています。石井委員がおっしゃった構造化の問題についても、いくつかの案が出ています。これに関して、具体的な何か方法論的なものがあればお願いします。

#### 子ども家庭部長

事務局で今後どのような報告書にしていくかという資料を用意させていただいて、今日どの部分をご議論いただくかの目安になればと、第五回子ども自然体験委員会資料をご用意させていただきました。これまで4回の会議を開催いたしました。

第1回は、各委員の経験を踏まえました自然体験に対する各委員のお考えをお聞きしました。第2回は、当市の現在行われている自然体験事業を私どもから説明させていただき、それに対する質疑お願いして何点かのご意見をいただきました。第3回は、それらを踏まえて自然体験の必要性をご議論していただきました。第4回は、概念図を基に自然体験は子ども達にとってこのような効用があるだろうというご議論をいただきました。

これらを踏まえまして、三章立ての報告書の構成を用意してまいりました。第一章は、武蔵野市の子どもを取り巻く自然環境と自然体験事業ということで、自然環境がどんどん少なくなっている現状、どのような自然体験事業が行われているかということ、第3回までの討議の内容をふまえ、1節として、子ども達の現状として、ナイフの使い方を知らないなど、事例を紹介しながら子どもの状況を説明していったと考えております。2節として、武蔵野市の自然体験事業の現状についてと考えております。

第二章は、自然体験の効用ということで前回の討議内容の概念図をベースにして、自然体験の子どもたちにとっての効用を明確にし、その結果として子ども達の健全育成には自然体験が不可欠であるという趣旨と、もう一つは行政が自然体験事業に取り組んでいく根拠の明確化をおこなうもので、啓発事業も含め自然体験事業の効用をしっかりとこの第二章の段階でいっておく必要があるだろうと考えます。

第三章は、これからの自然体験施策として、自然体験の効用を効果的に実現するためにはどのような方法があるかということをと考えております。今日の本題はこの部分になるのかなと思います。1節として、施策展開の基本的な考え方で、総合的体系的推進の必要性、自然体験の行政に関わる方針・ポリシーの確立、新たな取り組みの必要性、現25事業に不足している事業とその必要性、取り組み主体の考え方、行政がどこまでタッチしていくのかという考え方、場の提供の重要性というようなことを。2節では、このような基本的な考え方にのっとり、具体的施策事業の提言として、これまで出ておりましたプレイパークの設置や、生活圏内でいつでも自然に触れることのできる場の充実、親・教員・地域活動ボランティアのための野外活動の必要性にふれていく。これらは、あくまで例示ですが、基本的な考え方を据えて、もう少し具体的な施策あるいは政策を提言するというような構成を考えました。

もう一つ、川住委員から資料としていただいたように、こういうわけではなく、市内ではどういう取り組みをすべきだ、あるいは遠くに行くならこういう取り組みをすべきだとか、自然科学思考型の野外活動とか分類の仕方は様々あるのかなと思いますが、第2章の効用を受けた形の自然体験の施策方法論としては、こういう組立もできるのではないかと考えております。

梅田委員長

第二章の行政が自然体験事業に取り組む根拠、なぜ自然体験が必要なのかということについて私なりに感じたことがございますのでお時間をいただいております。

実は生れたばかりの赤ちゃんというのは目が見えないというのがわかったのは最近のことです。目の細胞もあるし角膜もあるし視神経もある、だけど見る訓練をしなければ見えるようには成らないということが、イギリスの男性の症例から判ったんです。小さいときにはしかになって角膜がにごって失明して52歳になったときに角膜移植をして眼帯

をはずしたら見えるものは光の渦だけだった。その後一生懸命見る工夫をして48日目にやっと6歳の子どもが書くような絵を描けるくらいものが見えるようになった。1年たって初めてまあまあの絵が描けるくらいになった。はじめは、歩くのも距離感がわからず怖くてノイローゼのようになってしまったそうです。脳の中には運動野という運動を司る部分があって、全部機能が備わっているけれども、フロッピーのように全部初期化しないとダメなんだと、いろいろな体験としないとできるようにならない、見える様にならないということなんです。私の孫が2歳8ヶ月になるんですが、走るし言葉も話すしすばしっこいんですが、ボールを投げるよといってボールを投げてやっても取れない、スピードと距離とによる手の動きの訓練を積んでいないので、とっさの動きができないということです。

それで、なぜ自然体験ということを上申上げるかということ、道一つとつても都会の道はアスファルトで進みやすいが、山に行けば滑り易い道だったり丸木橋であったり岩があったり、自然というのは複雑多様性をいっぱい持っており、都会の中で行動するよりもたくさんの動きと判断が必要になります。火一つつけるにも都会ではスイッチひとつでいいが、薪が湿っているのか、持つと細い焚き付けがいいのかなどたくさんの判断が必要となってくる。10歳ぐらいまでで運動野は成長が止まってきてしまう、そうすると小学校の3.4年生ぐらいまでは多様な体験をさせる必要がある。そうしないとフロッピーが初期化されずアンバランスな子どもができてしまう。いろいろな保育園や小学校からの報告を見ますと、ボールをよけられない、まっすぐ立ってられないとか非常にアンバランスな子どもが増えている。たくさんの感覚を使わなければいけないのだが、その経験を積んでいない。このことから、小さいときは複雑多様性の中でいろいろな経験をさせる必要があり、それが野外体験・自然体験の意義であろうということです。

もうひとつ、最近わかったことなんですが、他の動物とは異なり、人間には前頭前野があり、今は苦しいが頑張ろうとか将来に向けてこうしようとか、あるいは相手が困っているから自分はこうしようとか、思いやりとか将来計画とかを考える分野があります。りんごをむくのに、下手をしたら手が切れてしまう、皮を薄くむくのに手の加減をしないといけないなど、頭の中でいろいろ判断をしている。この作業に、前頭前野を活発に使っていることがわかったのですが、複雑多様な自然の中で何かするという事はやっぱり前頭前野を非常によく使うことになる。私は子ども達と山に行くときは、必ず藪こぎをするようにするのですが、藪こぎをすると枝などが顔にあたり、痛い思いをします。すると今度は後ろの人に枝が危ないことを自発的に伝えます、そういうふうに自然の中でいろいろなことをすることで、前頭前野も発達するのではないかと考えています。

それともう一つ不足しているのが群れだと思えます。小さい子どもを含めて動物の子どもみんな子供同士でふざけあい相手との距離感や対応を学んだのですが、いまは、鍵っ子あるいは学校でも授業が終わったら塾だお稽古事だと群れの中で自分をどう処するかができていない。これをやるには、自然の中で、多様・複雑系の中でチームワー

クを組んで何かやるのが非常に子どもの脳の発達にいいのではないか。この前頭前野は中学校ぐらいで決まってくるということです。ですから中学校になるぐらいまでにそういう訓練をなるべく付けさせたほうがいいのではないかと考えています。

なぜ現代の子ども達に自然体験をさせなければならないかの理由として脳科学的な側面からの理由も考えられることをご紹介しました。

それでは、施策展開の基本的な考え方を踏まえて具体的提言等ありましたらお願いいたします。

#### 藁谷委員

短期的な自然体験事業は、たくさんあるのではないかと、塾やスポーツクラブなどでも自然活動をやっているし、われわれのような民間団体でも、もちろん行政でもやっている。そのような中で新たに武蔵野市がやるには、セカンドスクールなどのように長期間の事業は、いろいろ障害もあるでしょうが、やはりそれだけの効果が歴然と出ているから続いていると思いますので、それに類する形である程度長期化・継続化するような自然体験の手法をオーソライズするのが新たな展開としてよいのではないかと。

それと自然体験というのは、人が人を教える、人と人が係わることが基本であり、自然の中に仙人のように置かれて自然体験しろといわれても誰も行かない。そこに、子どもという仲間がいたりとか指導者がいたりとか大人がいるからこそ自然体験のよさだと思います。ということは、行政の担当者が代わったから考え方が変わってしまった、人を長く置けないから物だけ建てればよい「プレイパーク作ればよいや」と言うような発想に成ってしまうのはもう時代遅れではないのかと思います。プレイパークをやっても一番問題になるのは、プレー安全リーダーや指導者だと思いますし、ピクトープをやっても管理できる教員がいるかどうかだと思います。そこにお金と時間をかけられないと結局イベント的な単純に「楽しかった」「良かった」との評価は得られてもどうかと思います。学校教育も学校で長い間生活をともにする子どもと先生方がいて成立するし、家庭教育においてもお父さんやお母さんたちが365日いることで成り立っている。子どもが継続的に自然体験できるような方法がないかなと思います。私の団体でも継続的に全てできている訳ではないので、そういう努力はしていますが。

#### 川住委員

ほとんどの皆さんは、子ども達を野に放ったら野生に還って昔の野生を取り戻してやっていけるのではないかと、なんとなく漠としたイメージをお持ちだと思いますが、野外活動をすることで、どのようなものが得られるのかを、もう一度市民の方々にここで議論したようなことをきちっとまとめた上で発信し、参加意識を高めしていくことが必要ではないかと思っています。

わたしは、今、会社で広報的なことをしておりますので、その中で心がけているのが

社内広報です。社内の意識を改革する上で、社内で何のためにこれをやるのかという社内広報が非常に大事だと考えておりました、それになぞらえて考える体質かも知れませんが市民の方々にもなぜ自然体験が重要なのか大切なのかということを体系立てて、あるいはもっと判りやすくお知らせし、少しでも認知してもらい、それにより自然体験活動を広げていくというアプローチも大切なことではないかと感じます。

#### 鈴木委員

この間いただいた表の中の横軸を期間として立軸を年齢として25事業を並べてみると、期間としては、体験の種類は非常に網羅されていることに気がつきました。また、対象年齢としては小学校高学年あたりにまとまっていました。

私が見て感じたことは、もう少し低年齢の未就学児が積極的に参加できるあるいは保護者が価値を持ってそれに参加させることができる事業がもう少しあってもいいのかということです。期間的なことなんですが、資料の中に生活圏で、いつでも自然に触れることのできる場の充実と言うのがありますが、短期間で年齢の低い子どもが参加できる事業といいますとほんとに身近な所で自然体験ができる活動なのではないかと思ったので、そういったものの充実を図ってほしいのかと思いました。

この間の川住委員のご提案を基にして私なりに分類して考えてみました。

1番は、主に未就学児や小学校低学年を対象にして遊びやふれあいを目的とした活動を一つのまとまりとしては、短期間でゆったり継続的にゆったりするのが適当ではないかと。2番目は、キャンプ自然体験型ですが、小中学生を中心に集団での活動を中心にキャンプアイヤーをゆったり物作りをしたり野外活動の基本を体験するようなもの、これは近場の1日あるいは2～3泊程度を伴うものが適当なのかと。3番目は、この間川住委員が自然思考・学習型という言葉をつけられましたけど、小学校高学年から中学生あたりを対象として自然観察や自然の中での実験、あるいは農林漁業体験を通して、主に知識を得ることを目的とした活動、そして4番目がセカンドスクールなど長期にわたる活動で1から3までの活動を網羅して多目的で、いろいろなことができる取り組みが一括りとなるのかと思います。

それから、この間川住委員の発言の中にもありましたが、指導者の育成を目的とした野外活動これはぜひ欲しい、先ほどの藁谷委員のお話の中にも活動を維持していくためには、人的な事柄が不可欠だとありましたが、これも必要だと思います。

#### 藁谷委員

鈴木委員の話の中で、うちも実は未就学児の事業が盛況で人気というか、実際そこしか参加者が来ないというような現実があって、子どもだけを預かって事業をしており、年少から預かってという要望さえあり保育園ではないので無理なので年中を対象にして、いつでもどこでも自然体験を5歳ぐらいでということで、昨年はじめて夏休みに30

日間毎日平日にやりました。もちろん何日も来る子もいれば1日だけの子もいましたが、近くの川原に行ったり公園に行ったりというプログラムを行い、小さい頃にこういう体験を親がさせてやれないということがあるのでしょうか、凄くニーズがあります。これなどはいままでの中で抜けている所、マトリクスの中に無い部分でもあるのかもしれませんが。

#### 梅田委員長

先ほど私が申し上げた脳科学では、10歳ぐらいまでに運動野の感覚というのが初期化されデータ蓄積されていくということから、低学年のときに、いろいろ、運動野の持っている見るとか聞くとか触るとか匂いを嗅ぐとかをできるだけいろいろと稽古させるということがいいのでしょうか。ただいまの未就学児の事業がすごく人気というのが、ご両親がそのことを認識してのことなのか、手がかからなくて助かるという考えなのか、わかりませんが。

さきほどいったように自然の中というのは複雑であり多様性がありアナログであるというところがいろいろな経験が出来るということだと思います。川で波が立っているところは浅く、波が静かな所は深いとか、プールで泳ぐのと違って川で泳ぐのはいろいろな判断が必要になるという、自然を体験するというのはそういうことなのでしょうね。

それから、先ほど学習型という話がでたのですが、これはまた運動野とは違った部位なんですけど、好奇心が刺激されると、今度は自分で探求していくという学習欲とかそういうものが沸き上がってきます。自発的な知的欲求は、探究心を生み、学習欲・創造力を生むと思います。

それでは、そこまでいっていないときにはどうするかということは指導者の問題になってくると思うんですが、指導のあり方にも、相手に聞く体制があるときには、インストラクト(一方的な教え方)でも聞いてもらえるのですが、そうじゃない場合は、双方向型インタープリート(質問しながら乗せていき教えていくというやりかた)になるし、そこまでも行っていない場合は、ネーチャークラフトとかゲームとかそのようなまずは自然に親しませることをプログラムしていかないと「草むらがヤダ」とか「汚い」とかになってしまうので、子どもの状態に合わせた教え方があると私は思っています。

#### 永田委員

行政が自然体験事業に取り組む根拠の明確化というのはお金を出す根拠ですから一番大切なことですね。それは、いままでの議論の中で、いまの子どもたちが非常に人工的な環境の中で育っていて本来身に付けるべきものを身に付けていない。いびつな人間になってしまう、だからこそ自然体験が必要だということで、そこに踏み出している武蔵野市は評価できるだろうと思います。セカンドスクールもやっているし、それを子ども達は嬉々として受け入れていくということで、証明されていると思うんですね。だからこのあたりのことは、根拠の明確化という点では、議論が尽くされているような気

がします。

#### 梅田委員

アウトソーシングになる理由は、野外で、かつ集団でという行動の場と経験は、現代の家庭ではなくなってしまった世界だからです。家庭やその周りでは、昔ガキ大将というのがいて、みんなで野原などで遊んでいた。この経験が今は、出来なくなった。違った意味のシンプルライフをやっています。単純判断・単純行動という意味のシンプルライフであり、言い換えれば、デジタルライフです。先ほどの脳科学でいうとテレビゲームをやっているときは前頭前野をまったく使っていないそうです。これを続けていると頭の発達が悪くなるということなんです。

#### 永田委員

すこしでも行政が予定調和的な人工的なこういう社会じゃなくて、複雑系で多様化した何が起きるか判らないところで幼い時から訓練することによって武蔵野市の子どもたちをよりクレバーな子どもに育てることは、必要な施策だと当然言えると思います。

#### 梅田委員長

その経験の多さから何か起こったときに経験のフロッピーディスクから持ち出してきた組み合わせることによって、臨機応変な行動が出来たり、あるいはものの考え方として一つだけでなく二つ三つの答えが出せるようになるのだと思います。

#### 永田委員

だからもっと端的に言えば、子どもたちにとって学校だけが社会じゃないということがわかれば、こっちにもっとおもしろいものがあるということがわかる場が設けられていることで、いろいろな価値観を子どもたちに明示できる。いま子ども達は輪切りにされていて、小学校受験、中学校受験とかで学力がその子の価値のような見方をされてしまいますが、昔のようにガキ大将がいて成績のいいやつがいてといろいろな子がいて、価値観もいろいろだった。今は、ガキ大将がいない時代になってしまいましたけど、そういったいろいろな価値観があるというのを子ども達に示せる場が、学校以外に自然体験させるということが、こういう子ども達をクレバーにする糧だということで、行政が何をやるかということへの一つの答えであるような気がします。

#### 梅田委員長

いま申し上げたような群れというものも家庭や日常の中でできなくなったため、せめて行政が集団で何かをさせるということで、人間らしさ、前頭前野の訓練する場を用意

するということですね。家庭でもできるという、いまは手を抜いているけれども家庭でもやんなきゃいけない部分もあるのではと思うのですが。

永田委員

それは、川住委員のいつた自然体験の重要性を市民にアピールして、各家庭でも考えてもらう。行政は行政でその仕方を考えてもらうことだと思います。

川住委員

先ほど鈴木委員からもご指摘のあった親とか教員の方々、そういうリーダー層を作るというプログラムが有効だと思います。そういうことをやると親もこういう風な教え方をすればいいんだ、ナイフの使い方など自分が知らなかったことを取り入れて、それを家庭に持ち込んで、家庭でもナイフを使ってえんぴつ削りぐらいできますから、そんな教え方であるとか、何のためにそれをやるのかとかを親子で議論しながら家庭の中でやるとまた親子の対話も生れてくる一つの材料提供になると思います。

梅田委員長

先ほど申し上げましたけれども、子どもを教える指導技術の面なんですけど、リーダーというやり方とインストラクターというやり方と、インタープリターというやり方と、ファシリテーターというやり方とそれぞれ少しずつ違います。相手の状態と指導すべきものによってやり方が違う、そう言うことも知らないとか無意味な教え方をしていることもある。親の訓練もその辺判らせてやらないと、「ご自分の家庭もおかしくなっているんですよ、だからこういう事を努めてやらないとおかしなことになりますよ」ということを知らせて、家庭でも何らかの手段をとっていただくということですね。

子ども家庭部長

リーダーの質を問うことと、自然体験の一般的な広がりを持続させるというのは、行政だけの力では難しいと思います。行政側から考えなければいけないのは、長期的で継続性のあるというキーワードをいただいています。特に藁谷委員にお聞きしたいのは、それに対する行政の関わり方のイメージです。全てを長期的継続的なもので、特定の個人に行っていくというのは、なかなか市民合意を得られにくい部分があるわけで、ある面で行政の関わり方の考え方があれば、こういう形で行政がかかわれば、その事業は継続性を持ちうるし、長期的な体験事業も成立するのではないかというような視点があればありがたいのですが。

セカンドスクールの長期化でも相当大きな転向であり、財政的な問題も含めて徐々に市民合意を形成していき、積み重ねた成果だと理解しています。単発的なものは止



めるのも簡単なのですが、継続性とか長期的のものといわれたとき、それをどう担保していくかというときは、それを全て行政が担うという形はなかなか難しいと思います。でするので、取組み方への行政の関わり方のアイデアをいただけるとありがたいのですが。

また、リーダーの育成についても行政側が講座を開いてリーダーを養成していくだけでいいのか、地域の中でリーダー育成の継続性を持ちえて上手に繋がっていくというのが理想的な形なんです。武蔵野市においてもコミュニティ行政しる青少年健全育成事業についてもそこが最大の課題だと私は思っているのですが、あらゆるリーダーの継承をどう担保できるかというのが大きな課題であると思います。

石井委員

いま子ども家庭部長がおっしゃったことは、どこでもあることで、武蔵野市だけではないと思います。野外活動センターがやっていたキャンプリーダーの育成も形式的には残っていても、ほんとにどこまで繋がっていたのか。

いままでは、継続は誰かが1人ががんばってやってきたけれどうまくいかなかったというのが現実だと思うのですが、それは何かというと時代なんだと思います。時代がそういう方向に動いていて、その中で、過去のやり方を継承しても絶対うまくいかないというのが事実だと思います。

そのために何を打開するかといったら、一つは非常に時間をかけて小さい子どもから育成して行って40年後を見越していくのか、もう一つの方法としては、武蔵野市は自然体験に積極的な市なんだということ、イメージ化をさせる。武蔵野に来ればこういうことができるという雰囲気を作る、さきほどの広報だと思うのです。もちろんそのためには市民を納得させなければいけません、少なくとも市民も武蔵野市はそういうところなのだからそういうことがいっぱいできて良いところなんだとすれば、自然にそういうことを求めている人たちも集まってくる。そういう雰囲気作りというか土壌作りということが、今は必要なのではと思います。まさに施策的にキャンペーンを張って「武蔵野市って自然体験の中で育つ子どもがいっぱい生れる町だよ」というような雰囲気を作り出していくというのが、かつて武蔵野市が教育に予算をかけ教育都市武蔵野というイメージを一つ作り出したのですが、そうすると自然に武蔵野市にそういう子どもを持った親が集まってくる、そして、そういう形で動いている学校教育を支えているという土壌ができる。

子ども達の現状は、子ども達の現状というよりも大人たちの意識です。大人はいろいろな側面で子どもを見ていかなければいけないのに、一面的な見かたをしている。でも、武蔵野市はそうではないんだ、武蔵野市に来ればこういう子どもが育っていくということがアピールされていくことによって、少なくとも武蔵野市が変わっていく、そしてその周りの都市も変わっていく。そのくらいのことをうたっていない限りは厳しいのかなと思います。

#### 鈴木委員

長期的な展望にたった人材育成ということについてですが。セカンドスクールには指導員というのがいまして、教員だけで7泊8日連れて行くわけではなくて、大学生ぐらいの人が7~8人各学校についていくわけですけれど、平成7年の第1回セカンドスクールを実施したときの5年生がいま大学2年生なので、ちょうどいまセカンドスクールの指導員ができる年頃になっています。この間、ひさしぶりにその子達14~15人にあつたんですが、そしたらその子たちが、先生セカンドスクールの指導者をぜひやらせてくれという、はじめた当時のセカンドスクールは国立少年自然の村で3泊4日でやっていた、体験の内容も今とずいぶん違いリкреーション的なことが多かったのですが、今から比べると半分にも満たない3泊4日の中でやった出来事を克明に覚えている、しかもほぼ全員が。こういうことは、他の学習ではまず無いことです。

#### 梅田委員長

いま私は、武蔵野自然塾というのをやっていて、環境教育系の人材を育てようとメンバーにはインタープリテーションやファシリテーションの講座を受けさせながらこれから子ども達を中高生になったらサブリーダーとしていくとの展望でやっているのですが、そういうことが長く続けば、次世代が出て来るのかなと思います。我々50代40代後半の人は高度成長前の自然原体験をしているのですが、45歳以下の方は原体験をしてない方も多いのである意味で断絶がある、いま、我々が頑張って何とか次世代を作らないといけないという気持でやっています。

#### 石井委員

自然クラブが成功した理由は、1人のキーパーソンがいたからでしょう。お分かりでしょうが須田先生という先生がいて、その須田先生を柱として30年間継続してきた。もっといえば、須田先生が自然クラブを設立する前の武蔵野第三中学校の教員として奉職してから武蔵野第四中学校をやめるまでの30年ぐらいの間に育ってきた人たち、須田先生を取り巻く人たちが自然クラブを支えてきている。いま、須田先生が野外活動センターに退職後いらしゃるから、自然クラブがなんとなく続いているのですが、須田先生も仙人ではないのでずっと生きているわけでもないで、そうなったときにどうこれを変えていく・継続していくのかということが、いま私たちの課題となっています。

何がしたいかと言うと、自然クラブのような形、たとえば、梅田さんがやっているものも梅田さんという存在がいるから続いている部分があつて、行政としてもかつては、須田先生みたいな存在を維持するシステムがあつたのです。しかし、今学校教育の中では、教員がどんどん異動しますので、無理です。かつては、三十数年間1人の人間を武蔵野市がずっと維持して、その中で育てて、そして須田先生のやることをある程度

行政がバックアップして自然クラブというシステムをつくるという柔軟性のある行政システムがあつたのですが、今あれだけのことができるのでしょうか。行政側にある程度柔軟に対応できるシステムがないと、あのようなひとは、継続しないのではないのでしょうか。

子ども家庭部長

よくあるのは、組長の思いとかそういうもので繋がるというのはあるのですが、今副委員長がおっしゃったようにシステムとしてどう作り上げるかというのが、非常に大事だと思います。

石井委員

これからは、それがないと続かないと思います。

子ども家庭部長

人材というのが、すごく今回の大きなテーマになるなど、今日お聞きしていて思います。

石井委員

たぶん自然を使った子どもを育てるプログラムは、他の強化プログラムと違って、他の強化プログラムは、ある程度機械でもできる部分も要素としてあると思うんですが、自然を対象とした場合は、絶対人間がやらない限りはできないでしょう。

子ども家庭部長

先ほど、鈴木委員からもセカンドスクール経験者が大学生になっていて、是非手伝いたいという話がありましたが、育てるということは、講座を開いたりどこかに連れて行くとかではなくて、活躍の場をどう用意できるか、皆さんの話をお聞きしていると人材育成に対応して活躍の場の提供ができるかということだと思います。

石井委員

結果的に、今おっしゃったように、かつては、須田先生とかある1人の人間がそれを両方とも動かして行政ともやりあい、それは太い人脈があってそのつながりの中で、一つ構築していった。しかし、今は人脈等を動かしてそういうものを作り上げていく時代ではないです。また、それだけの人材が生まれてくればいいですが、おまえチョットやれといわれても私にはできません。だから、いま須田先生の息子さんと二人三脚でやろうかという雰囲気にはなっていますが、でも、あの大きいパーソナリティは、おいそれとは越えられません。

このことから、これから継続して武蔵野とはこういうところだというものを作り上げていくには、システムとして何かしらを作り上げていかないといけないと思います。そのシステムの一つが藁谷さんがやられているようなNPOや大学というのも一つの方法かもしれないし、そこにはいろいろな可能性があるような気がします。

#### 児童青少年課青少年係長

キャンプカウンセラーという制度が野外活動センターにありまして、私は、平成元年から11年まで係わっていました。先ほどからいわれているような人材育成・リーダーを育てていくというのが一つの大きな目標でした。

そのころは、野鳥教室であっても昆虫教室でも、次のリーダーが育っていくためには、その柱になる方がちゃんといたということです。もう一つは、キャンプカウンセラーというの、実は中高生を対象としたチャレンジキャンプというのが当時ありまして、小学校1・2・3年生はファミリーキャンプ、4.5.6年生はジャンボリー、中高生はチャレンジキャンプ、そしてチャレンジキャンプを卒業した子がキャンプカウンセラーとして、そのとき一緒にキャンプをやった大学生のスタッフを目標にして長い間やってきてくれたというそういう人間の流れがあって、カウンセラーになっていくと地域でのジャンボリーの指導者として来てくれる。そういうことで還元されていくという状況があったんです。

しかし、そういう人材を育てても活躍する場が無いんです。ということで平成7年にセカンドスクールが始まる時にお願いして以降6年ぐらい野外活動センターからカウンセラーを派遣してやってきたという経緯があります。セカンドスクールで知りあつた子どもたちにカウンセラーがチャレンジキャンプというのがあるんだというと、子どもたちが参加する。多いときでは百何十名の参加者がいました。その後チャレンジキャンプが中止になってしまったのも参加者が十人とか二十人になってしまったということがあったようです。

ですから先ほども言いましたが、指導者を育てていくことの難しさを、今も感じています。もう一度そのへんを再構築していかなければならない立場に私たちもあると思いますし、一番柱になっていくところかと思えます。

もう一つは、平成13年から中高生リーダーということでボランティアリーダーの育成を、今やっております。14年15年で約100人の中高生がきてもらっています。これは、チャレンジキャンプがなくなってしまってから、カウンセラーのなり手がなくなったということに危惧して始めました。このときの中学生が6~7年たつと大学生になるので、あと3~4年頑張れば次の世代が育つのかと思っています。今回委員の皆さんにその辺を視野に入れていただきたいことと、その若者達が活躍できる場を是非考えていただきたいと思います。

梅田委員長

活躍の場というのは市内でという形になるのですか。

児童青少年課青少年係長

石井先生の言葉を借りれば、武蔵野で子育てしてこうすればこういう青年が育つよということで、武蔵野市の皆さんに認知してもらおうということであればそうですが、ただ、当時のキャンプカウンセラーというのは、優秀なスタッフだったので、民間の旅行会社であったりあちらこちらから声がかかって行っておりました。

梅田委員長

世の中のニーズは、強いと思うんです。実は、私は、森林インストラクターという会に属しておりまして、いままでは、ボランティアとして動いていただけなんですけど、そうすると結局は定年になって暇とお金を持った人たちの同人会のようになってしまう。若い人で森林インストラクターの資格を取った人は、そんなことやってられないと、例えば鳩ノ巣に行けば往復2~3千円かかってしまって、毎週なんて出られないという感じでした。

いまは、いろいろなところから講座をして欲しいとかいう依頼等が続々と来ています。だから、それを受け止める体制とPRをやれば、ニーズはけっこうあります。ですから、どう受け止めて、能力を持った人たちにどのような場を与えるかということではないかと思います。ただ、タレント事務所的なところが実は一番大変で手間隙かかりますけど。

安藤委員

武蔵野市の中で継承しているもののひとつで、ジャンボリー30年の歴史ですが、これは私が武蔵野に来て素晴らしいものがあるなと思いました。

ちょっと前は、まるで学校行事のように子供が盛んにたくさん参加していたと聞いているのですが、こここのところ、セカンドスクールもありプレセカンドスクールもあるので、「ジャンボリーはいいかな」という傾向もでてきています。でも、ジャンボリーのように行政が手をつけたあとに地域が繋げていくというのは、ほんとにどこにも無くて素晴らしいものだと思うので、今は参加率が下がっているのもう少しサブリーダーの利用とか親があまり指導者になっていないことに対しての親へアピールとかをして、さきほどの市民の自然体験に対する意識を高めるという部分にも係わってきますが、親たちを実習経験するというのもいいかなと思います。

この間、二俣尾に見学に行った時に、ここは近いし、親の研修・中高生の研修にいいなと思いました。ジャンボリーの充実を図りながら方向性を持っていくのも一つかなと思います。

石井委員

ジャンボリーの参加率というのはそんなに落ちているのですか。

児童青少年課青少年係長

学校によっても違うんですが、たとえば、今、安藤委員の出身の本宿地区も4.5.6年がそれぞれ一クラスずつになっています。

安藤委員

正確に言いますと今年度は、一クラスは5年生だけなんですけど、他は42人が半分になった二クラスとかそんなのですから、人数的には一クラスと同じようなものです。

4.5.6年の学年の中の何パーセントというのを見ると本宿の場合は去年37パーセントぐらいしかありませんから、ぐっと減っていると思います。

例えば4年生だけ見た場合、秋にプレセカンドスクールもある、夏にジャンボリーもあるとなると、お泊りを体験させるならプレセカンドスクールがあるからいいかなというの、もし私が4年生の親だったらそういう風に考えるかもしれません。

子ども家庭部長

私は、副委員長がおっしゃった大人たちの意識のほうの問題なんだというのと、先ほど藁谷委員がおっしゃっていた幼児の預けっきりのイベントにはニーズあるというのは、今のお話の中で皆繋がっているのではないかと、その辺に対してどういうアプローチを打てるかというのが大きな課題ではないかと思います。

石井委員

児童数の減少は仕方ないのですが、ジャンボリーの参加率の推移について過去20年ぐらい各地区別に出してもらえませんか。

子ども家庭部長

次回までにつくっておきます。

宮崎委員

桜野では、6年生五十何人で参加4人です。4年生が多く5年生6年生とだんだん減っていく傾向にあります。

石井委員

武蔵野市の私立中学のむ受験率はどれくらいですか

鈴木委員

六年生のおよそ三分の一で、10年前と比べると倍ぐらいになっています。ですから5.6年生の夏休みが夏期講習でつぶれるという数はかなり増えていると思います。

藁谷委員

学校だけでなく、民間のキャンプも顕著に出ていますね、5.6年生の割合は、この10年で半分以下になってますね。参加者の低学年化が確実に我々自然体験の団体でも進んでいます。

子ども家庭部長

地域子ども館という放課後の施設事業をしていますが、低学年しか集まりません。

藁谷委員

小学校3年生までは自然体験、3~4年生はスイミングやサッカーなどのスポーツ、5~6年生は受験というような単純な分析をスタッフとしているのですが。

石井委員

私が危惧していることもまさにそうですね。子どもを放課後残すなどというと、怒られるんですね、早く帰宅させてくださいと。

鈴木委員

四小もそうです。子どもを残せないんです。

梅田委員長

ますます低学年の間に、なるべく自然体験をしていかなければいけないということですね。

藁谷委員

武蔵野などは強制的にというか学校でそう言うのがありますから、救いだと思いません。

石井委員

自然クラブは、5.6年生ですけど、ほとんど空きもないですけど。

何がしたいかと言うと、野外活動センターの事業を見てても、結果的に行政が見るのは、数値なんです。やはり、参加者数が落ちていくと、これはダメな事業だから変えなければいけないというのがありますね。ジャンボリーだってへたすればそうなる可

能性があるわけで、確実に割合が落ちていけばこれは市民参加率が下がっているのだから無くすべきだということにもなりかねません。それは確かに正当な論理化も知れませんが、しかしながら、子どもの参加割合は落ちているけれど核になる子どもは残っていて、参加数が減っても、確実にジャンボリーに参加してそれなりの体験をしてほんとに育つ子どもは、同じぐらいの数を推移していると思うのです。とするとそういう子ども達にとっては、そういう事業は割合が落ちたからといって無くされては困るんです。

高石委員

ジャンボリーに関してなんですが、指導者の年齢が高くなっている。そうすると子どもの遊ぶ枠が、指導者が高年齢化してしまうと山登りに行くといっても近場でということになってしまって、若いリーダーが来てくれる方が親御さんもいいというんです。指導者が年取っているから、子どもがかかわりやすいという感想もです。

石井委員

それはすごいわがままですね。ジャンボリーのシステムというのは青少協の校外委員のPTAのお母さん方とかがどんどん更新されて、なおかつ、地域も更新されて育っていくというのがかつてだったような気がするのですが、現実には、子どもを預けて他に出かけてしまう親もいる。しかしそうはいつても、ベースになる子どもがいるわけで、参加割合が下がったからこれは止めるというものではない。

高石委員

一般的に今の親御さん達にそれを判ってもらう方法が難しい。お便り一つにしても優しく書いても、例えばあそべーのボランティア募集を二回かけたんですが、1人だけしか来ない、そのぐらいに関心度が無いんです。親に対して何かやらないとどうにもならない、そこに課題がある。それとあまり地域地域といわれても、地域の人も高齢化しており後が続かない、その後ろがないということなんです。

川住委員

ジャンボリーは、私も7年ぐらいやらせていただきましたが、その間けっこう指導者が変わっています。最初の3年ぐらいは、実踏の際にお会いすると、皆さんお変わりなくお元気だなと思っていた方々も、大分世代交代が始まってきているんです。第三地区は、だいぶ若いキャンプカウンセラーが揃っていて、その人たちを中心にうまく具合にこれまでのところ世代交代が進んできていると思うんですね。

どうしたらそうなるかという、一つ大きなことは、先ほど話ししてきた人材育成の中でネットワークなんです。ゼネレーションも含めたネットワークのことなんですけど、こういう場とかそういうことが大事だという意識を地区なり、大げさに言えば市民全体がそうい



う意識をもってやっていけば、そして、行政のほうもそういった場を提供していけば、おのずと意識も目覚めてくると思います。

#### 高石委員

私の地域は、参加人数が多いところなんですが、その割に指導者の確保が困難です。商業地域の方と勤め人が多いところなので、いろいろなところで広報活動をしてもなかなか若い人が来てくれないし、来ても1年で去っていく、人の確保が難しいです。

#### 川住委員

コミュニティ作りにも関連すると思いますが、住民の方々がずっとそこで住んでいて、その中で世代交代が行われていくという中では、ネットワークも構築し易いですが、出入りが激しい社宅が多いとかそういう地区では厳しいところがあります。そこは市として自然体験活動をしっかりやっていくんだと、今の市長さんがそう言う意味では理解のある方なので、ジャンボリーやハバロスクなどを自ら引っ張って来られたということが、今花開いているところもあると思うのですが、そうしたものをきちつと行政の中で位置付けて、たとえば、自然体験宣言だとか、エールの何か幹になるものをもって行って、人が変わっても世代が変わってもそれを幹にしているいろいろな活動を体系付けてやっていくことを、行政としても考える時期ではないかと考えます。

#### 高石委員

質問ですが、指導者の養成というのがこの頃あまりやられていないようなのですが、いろいろな地域が参加して楽しいし、知識を得られたと思うのですが。

#### 児童青少年課青少年係長

今年度から復活しました。ここ5年ぐらいやっていなかったのですが、というのは、前期は来るが後期は来ない、人集めが大変であったのでマンネリ化してはいけないので、休止していたということを前担当者から聞いております。しかしながら、やはり地域の人材育成からもやっていかなければいけないということで、今年度より始めました。

#### 川住委員

たぶん、親御さんの中にもやりたいという人がいると思うし、親御さん以外にも、その地区に住んでいる人たちも含めてやる気を持っている人たちはいると思います。その人たちの肩を誰が叩くか、そういう場に誰が引きずり込んでやるかということが大事なところで、その中で行政にもある一定の役割があると思うし、我々市民の役割もあると思う。そういった肩を叩くという意味でも何かこう幹になるようなものを、武蔵野市民である限り必ず年1回は自然体験活動に参加しなければいけないというような意味を持つ

ようなものが、必要だと思います。

子ども家庭部長

人材育成のこともそうなんですが、気になっているのは、永田委員のほうから日常的に自由に自然に触れられる場が必要なんだということなんですが、具体的に我々が施策化するとか事業化する場合のイメージがありますか。

永田委員

私は、システムとか人を信用してない、というか信用しているのだけれども、先ほどおっしゃったように1人の核になる人がいるからもっているという部分が非常に多い、それは、各ジャンボリーでも各地区そういう人が頑張っているから、支えられているという部分が多いと思います。

それはもちろん大事だけれど、ほっといていい場、作って後は子どもたちに勝手にやらせておく自発的な場を提供するほうがいろいろなことを子どもたちが考えるのではないかと思っています。ビオトープもいいんです。ビオトープを勉強して立派だなあと思いました。でも、それを大人が管理しているのではダメで、極端に言うと子どもたちが取り放題のビオトープ、そういうものを提供する。たとえば、井之頭公園の池で魚を釣っていて怒られている子がいる。子どもたちが怒られずにそういった自発的な場を設けることができないのかなと思い、考えたら千川のまだ整備されていない所あたりを子どもが自由に釣りをしたりザリガニ取りをしたりできる場所にできないかなと、わざわざ郊外まで行かなくても、勉強する場としてのビオトープでなくて、体験できる場として、取ったら返すということを基本として、そういうところを作っておくということがいいのではないかな。そういうことが、人に頼るのではなくて、小学校2・3年ぐらいの子どもが安全にあそこだったらできるかなと思います。

鈴木委員

ビオトープの話が出たので、今永田委員が話されたビオトープの活用法はとても素敵だと思います。第四小学校のビオトープは一昨年の冬に完成しまして、去年の夏にやっと水や草などが安定したので、なにを入れようかと考えて板橋の小学校のビオトープから関東黒めだかをもらってきたらうまく繁殖しまして、それが絶滅危惧種だということを子どもたちに教えたところ、子どもたちがそれをとっても大事にするんですよ。水の中に入ったりせずにそつと見ている。そういう世界のビオトープもあつていいんだなと思いました。

永田委員

さっきの広報の話にしますとね、全市ビオトープ宣言でもいいんです。たった100坪程度のビオトープですが、専門の人、ボランティアを組織して守るにしても、そんなにお金をかけなくてもいいと思うんです。水溜りを作ることができれば屋上でもできるし、校庭のどこかでも水溜りを作って、そこに何かを放してもいいし、お金をかけなくても自然に生物が戻ってくる。綺麗な都市公園化した学校ではなく、生態系を踏まえた小学生が体験できるような場の提供ができたらと思いました。

この間川住委員がおっしゃった「身近な所」、「郊外」という分け方で具体的な場としてどう提供していくか、宮崎さんがおっしゃったようにプレイパークもほっとけよという考え方ですし、こういつたものをどう組み合わせっていくかということが、自然体験を子どもたちに提供できるかということだと思います。で、武蔵野市は、自然に理解のある市だということをおPRすることだと思います。

#### 子ども家庭部長

今回はいろいろとキーワードになることをいただきましたし、人材育成の重要性ということをお皆さん異口同音におっしゃってましたのでその辺をどうまとめるか、項目だしを次回にやって、簡単な箇条書き程度でその先をその差は詰めていただき特に3章をもう一度お願いしたいと思います。鈴木委員からも資料をいただきましたので構成の方ももう一度工夫したいと思います。

ところで、藁谷委員にお伺いしたいのですが、就学前の子どもに対する親を連れて行かない自然体験とは、どういう事業なのですか。

#### 藁谷委員

親御さんというのは、そこで何かができるから参加させたいという気持ちになるので、なんにもありませんとか自由ですみたいなことでは、参加者は集まりません。ですので、秘密基地だとか、焚き火とかテーマをもつてやりますが、実際には、幼稚園児ですからあっち行ったりこっち行ったりで、ここでは火を起こして焚き火をやっている子もいたり、川遊びをしている子もいたり、虫を捕まえている子もいたりして一日遊んでいるということになります。時間は、10時から4時まででお弁当持参でやっています。

うちのメンバーの中では、子どもたちが自分達で遊びを作るというのがコンセプトなので、指導者は、安全を管理することが役目で、子ども達同士が遊びを作ることを大事にしてやっています。子ども達の反応もいいですし、うちのスタッフはやっちゃいけないダメとは言わない。家でも学校でもダメ・いけないとかいわれているので、のびのびさせてやろうということでやっています。12月でも川遊びはします。ただし、タオルをたくさん用意したり、着替えをもって来させたりして、十分な準備をしています。

もう一つのコンセプトは、日常化なんです。自然体験が非日常のことではないということをお親や子どもにもわかってもらいたいというのがコンセプトです。都市化によって、

自然体験が非日常だと思っている親も子どもも多いのですが、我々の中では、その遊び場が日常の自然体験であるというコンセプトです。なお、我々は、この事業に子ども4~5人に1人の指導者をつけています。

子ども家庭部長

中学生はなにをやってもなかなか来ないですね。

藁谷委員

中学生とキャンプをして感じるのは、自然体験をしたいとか山登りをしたいとかというのは、2番3番の目的で、感想を聞くと心底何かを共有して話をしたり笑ったり泣いたりということが出来る場がどこにもないんだ、それが出来るのがこの自然体験だというのがもっぱら多いですね。少ない中学生の参加者ですけれども、毎回来る人は違って中学生ぐらいの年代の人は、皆います。山登りなんかしに来たんじゃない、ほんとの友達を探しに来たんだみたいなところがあります。年齢も近い大学生ぐらいのお兄さんお姉さんと自分が少し大きくなるとああいう風に成れるんだという目標の人に会っているという感じもあります。

川住委員

中学生の参加が少ないという話ですが、三小地区は割合多い、何でその子らが応募してくるかという、やっぱりお兄さんお姉さんに指導を受けて楽しかったという原体験から、ゼネレーションを越えて広がっている、そういう世代間のネットワークを維持発展できるのかというところは、もっと真剣に考えてもいいところだろうし、行政が果たす役割もあるし、もっと言えば市民も自発的にそういう役割を果たしてゆくということを考えていくことが相当程度あるし、親であり先生の意識もかえてかなければいけない。

もうひとつは、世の中が成果がとわれてキュウキュウとしているところがある、それ以外のところでちょっとほっとできる、自由にできる空間というのが、藁谷さんのスクールも一つの場になっているかもしれない、我々にとってもサプリーダーにとってもジャンボリーというのがその場になっているような気がしてならないので、そういう方向性で考えると解決策になるかと思います。

子ども家庭部長

ジャンボリーでもプログラムを詰め込みすぎると悪いほうに働いてきますね。

鈴木委員

初めの頃われわれは、欲張りでした。一日のうちにいくつもプログラムを並べると、こちらも追われるが、子ども達も追われて大変でした。半日に一つぐらいにしたら成果が

上がってきました。

子ども家庭部長

たくさんのご意見をいただきありがとうございました。次回までに今日までのご議論を箇条書きのようにして用意しますのでそれを皆さんで叩いていただくということでお願いいたします。

今後の日程について

第6回：平成16年5月10日（月）午後6時30分～

場所：商工会館 市民会議室

第7回：平成16年6月10日（木）午後6時30分～

場所：商工会館 第一会議室